

キャリアデザイン講座 I における e ポートフォリオ活用

吉 田 咲 子
阿 部 一 晴

I はじめに

本学でキャリアデザイン講座を正課に組み入れることになったのは2005年度からである。「自信と希望を持って社会に出ていくことのできる人材の育成」を目標として、総合的で実践的なキャリア教育課程を構築し、推進していたこの取組は、2007年度文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム（以下、現代GP）に選定された。この取組の中では、教育方法として以下の5つの方針を掲げていた。

- ①徹底した個別対応教育の導入
- ②学習効果を保証する新たな教育プログラムの導入
- ③学習支援のためのICTとeラーニングの活用
- ④学生総合データベースの構築と活用
- ⑤体系的なインターンシップの実施とその支援

学生個人を大切にしたいキャリア教育の方法を「徹底した個別対応教育」に求め、その実現を支援するために「ICTの活用」に着目した。個別対応教育は多様な学生に対して、教育効果を上げるための唯一の解決法である。ただし、これを実現するには時間的・空間的に学習およびコミュニケーション形成の場を広げる必要がある。その課題をユビキタスな教育環境を可能にするICTの活用で解決すべく取り組んでいた。（山本ら、2009）

現代GPの選定を受けたことが追い風となり、この期間に学生生活を支援す

るシステム化も進みつつあった。2008年度には「eポートフォリオ」機能の本番運用が開始された。

キャリアデザイン講座Ⅰでは、講義での気づきをレポートにまとめ、そのレポートを定期的に振り返ることで、学習効果を向上させる試みを行っている。当初は、講義中に学習したことを用紙に記入し提出することとしていた。しかし、受講者数の増加に伴いレポート提出とそのフォローの効率化の必要性を感じ、また、他大学の取り組みを調査するなかで、学生が気づきを振り返る機会を容易にする工夫が必要であるとの思いが深まっていった。その結果、現代GP完成年度である2009年度、キャリアデザイン講座Ⅰの課題提出にeポートフォリオを活用するに至った。

本稿では、「eポートフォリオ」に関する本学の具体的な取組について、キャリアデザイン講座を取り上げ報告する。

Ⅱ キャリアデザインとは

バブル崩壊後の1990年代以降、就職がそれまでのようには容易でない時代が続いた。終身雇用が一般的だった日本企業概念も崩壊し、社会環境も大きく変化し、この間に大学における就職支援も強化されてきている。就職支援の強化に伴い、「キャリア教育」「キャリア形成」「キャリアデザイン」というキーワードが注目され、2003年4月には法政大学に「キャリアデザイン学部」が設立され、自らの学び方・働き方・生き方を主体的に切り拓くことのできる人材育成が専門教育として周知されるようになった。

2006年12月、約60年ぶりに教育基本法が改正され、「第1章 教育の目的及び理念」の第2条「教育の目標」(資料1)の二項には以下のように記載され、就労観の養成が教育目標の一つに位置付けられた。

「個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養うとともに、職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養うこと。」

(文部科学省、2006)

「キャリアデザイン」とは、自分がどのような生き方をしたいかをデザインする事、その為には今何をすべきかを主体的に考える事である。本学では当初、キャリアデザイン講座は、就職支援担当部署（当時は「就職課」）で正課外講座として開講していた。「就職」を教育の具体的な成果の一つとしてとらえようという発想が次第に芽生え、就職支援担当部署の要請で、それまで正課外で実施していた「キャリアデザイン講座」を正課に組み入れることになった。2005年度入学生から1・2年次に配当する自由科目（卒業単位に含めない科目）とし正課に組み入れることになり、これを2007年度には、全学共通科目として卒業単位とし、キャリアデザイン講座ⅠおよびⅡの2科目増強に至った（山本ら、2009）。

キャリアデザイン講座Ⅰでは、1年生を対象に自己分析・自己理解を目的とし、講座Ⅱでは2年生を対象に、世の中の仕組み・職業理解を目的とした。また2009年度には、3年生を対象に職業体験を目的としたキャリアデザイン講座Ⅲを開講した。それぞれの授業概要はシラバス（資料2、資料3、資料4）に記載のとおりである。

キャリアデザイン講座Ⅰは、毎回のテーマに基づき、講座で自分が感じた事・気がついたことをレポートにまとめる事を課題としている。教えられる知識ではなく主体的に自分の生き方を考え、その目標に近づくために、講座での気づきは、学生生活を通して日々の過ごし方を考える動機づけとなり、卒業後の進路を決める際に参考となる。主体的に気づいた事は、その日に文章にまとめることで記憶にとどめる効果がある。また、ときどき振り返ることでその気づきを思い出し、日々の過ごし方を充実させることでさらに効果が上がる。

Ⅲ eポートフォリオについて

1. ポートフォリオ

「ポートフォリオ」という言葉は日常生活ではあまり耳にすることがないが、英語の“portfolio”のことで、直訳すると「紙ばさみ」である。「持ち運びがで

きるように書類を入れるもの」のことで、一般には「書類カバン」「携帯用書類入れ」「折りカバン」などを示す。また、「画家・写真家・デザイナーなどが自分の作品を整理してまとめたもの」や「モデルなどが売り込み用の自分の写真を入れるもの」もポートフォリオと呼ばれることがある。経済・金融分野では、もともと株式用語で「有価証券一覧表」のことをポートフォリオというが、「資産一覧表」「顧客リスト」などの意味でも用いられることがある。有価証券を紙ばさみに入れて保管・携帯したところから、有価証券一覧表のことを意味するようになり、さらに「資産構成」をさすようになった。ポートフォリオ理論と呼ばれることも多いモダンポートフォリオ理論、安定した資産運用を行う手法であるポートフォリオインシュアランス(portfolio insurance)、資産運用の際に「安全性と高収益性を可能な限り両立させるように組み合わせる分散投資」をさすポートフォリオセクション(portfolio selection)、有価証券買付による間接投資を意味するポートフォリオインベストメント(portfolio investment)、資産を積極的に運用するアグレッシブポートフォリオ(aggressive portfolio)、株式市場にあげられた全銘柄を時価総額の構成比率で購入したマーケットポートフォリオ(market portfolio)なども用いられる。

教育分野でポートフォリオという用語が注目される様になったきっかけは、ポートフォリオ評価法であると考えられる。ポートフォリオ評価法は総合的な学習評価法として、ロンドン大学のS. クラーク教授を中心に考案され、1980年代後半にイギリスやアメリカで取り入れられ、1990年代後半に日本に入ってきた。従来の筆記試験などで測定できない個人能力の質的評価方法とされている。学習過程で学生・生徒が作成したさまざまなものを収集し系統的に選択し、教師とともに学生・生徒自身も自己評価を行い、ステップアップしていくというものである。教育分野で単にポートフォリオと言った場合、ここで使われる収集物そのものをさす場合と「ポートフォリオ評価法」、「ポートフォリオ学習」、「ポートフォリオ教授法」、「ポートフォリオ評価」などの手法をさす場合がある。

大学を中心とした高等教育の分野では、特に最近になってこのポートフォリオという言葉を目にしたたり、耳にしたたりすることが多くなっている。これは、「教

育の質保証」や「学士力」といった文部科学省や中央教育審議会の最近の高等教育に関わる施策と無関係ではないだろう。従来の高等教育の内容や方法は、各大学等もしくは各教員に一任されているといったことが否めず、大きなバラツキがあったと考えられる。ここに来て、ある意味ブラックボックスであった高等教育に対して、「透明化」「見える化」が求められてきたとも言える。そのため、教育の手法等においても科学的で到達水準達成までの過程におけるエビデンスを明確に残す必要性が出てきた。これらを実現する方法の一つとして、ポートフォリオまたはポートフォリオ的な考え方が重視されるようになってきたのではないだろうか。また、昨今の情報通信技術の急速な進化にともない、教育の分野でもさまざまな ICT の活用が進んでいる。これにともない、従来紙ベースでアナログ的に管理されていた教育ポートフォリオのデジタル化も進んでいる。学生・生徒の学習過程の記録をすべてコンピュータ上で一元管理してしまうという考え方である。こういったものは、「電子的なポートフォリオ」という意味で「e ポートフォリオ」と呼ばれる。e ポートフォリオの詳細については、後述する。

2. 2つのポートフォリオ

ここまで、教育分野でのポートフォリオを一括りにして取り扱ってきたが、実際には2種類のポートフォリオが存在する。一つが「ティーチング・ポートフォリオ (TP)」、もう一つが「ラーニング・ポートフォリオ (LP)」である。

ティーチング・ポートフォリオは、元々米国の大学で教員評価のための教育業績を蓄積・記録するという性質のものであった。日本では、大学教員を評価するという文化が根付いておらず、同じティーチング・ポートフォリオと呼ばれるものも米国とはかなり違ったものとなった。ちょうど、日本の高等教育機関でも FD (Faculty Development: 大学教員の教育能力を高めるための実践的方法) の重要性が広く認識されるようになってきている。これらの活動の基となる教育活動等の記録、ふり返り等がティーチング・ポートフォリオである。授業シラバスや授業改善のための計画等も含まれる。現実には、国内大学でこ

のティーチング・ポートフォリオを組織的に導入しているところは、弘前大学等を除いてほとんど無いというのが現実である。ただし、今後FDに対する認識が更に高まっていく中、ティーチング・ポートフォリオの利用も拡大してくるのではないだろうか。

もう一方のラーニング・ポートフォリオは、より広く普及していると考えられる。一般的に教育分野でのポートフォリオと言えば、ラーニング・ポートフォリオのことを指す場合が多い。これは、学習者が学習する視点に立ちさまざまな過程の記録等を蓄積していくものである。単なる学習記録の蓄積ではなく、さまざまな学習に対して、目標や計画を立て、実績との比較・評価や反省など次ステップにつなげていくサイクルが必須となる。ここでは、特に指導教員や他者からのフィードバックといったものも重要である。この部分が紙ベースの文字通りのポートフォリオではなかなか扱いが煩雑（教員との直接紙媒体のやり取り等）であったが、ICTの活用により扱いが非常に容易になったことが、ラーニング・ポートフォリオの利用拡大に大きく寄与していると考えられる。

3. eポートフォリオとは

eポートフォリオは、電子的なポートフォリオのことである。簡単に言えば、パソコンを使い学生の学習記録等の情報を電子的に取り込んだり保管したりするものであり、Webベースの情報管理ツールのことである。元々ポートフォリオとは、紙ベースのものであったが、これをコンピュータ上に実装することによって、従来できなかったさまざまな機能を実現することができるようになった。前述したとおり、ポートフォリオ（ここではラーニング・ポートフォリオを指す）では、①授業や学習プロセスで何を学んだか？②それがどのように活用されたか？③なぜそのことを学習することが重要であるか？④学習成果が到達目的に沿ったものか？等あとのふり返りにつながる情報の蓄積が非常に重視されると考えられるが、電子的な形式（いわゆるデジタルデータ）で管理されていれば、順不同に記録された情報を必要に応じて、並べ替えたり、抽出したり、統合・加工するなどの操作を容易におこなえるというメリットがある。

また、ポートフォリオが必要となる背景である、学習者の能力向上そのものと向上のエビデンスには、主体的な取り組みと継続的な取り組みが不可欠であると考えられるが、この面でもパソコンなどのデジタル機器の活用のメリットが大きい。単に紙のポートフォリオを電子化しただけではなく、新たな機能や使い方が付加されたものが e ポートフォリオであると言える。

Course Management System (CMS) や e ポートフォリオなどの e-learning 技術を用いて高等教育の質的転換を推進する、名古屋大学発のベンチャー企業である株式会社エミットジャパンが、e ポートフォリオについて 3 つの機能と 6 つの情報カテゴリーをまとめている。

3 つの機能とは、e ポートフォリオのできることであり、それらは以下のよう
にまとめられる。この考えのベースは、後述する OSPI のシステムに反映されているものである。

ENTER : 入力

個人データの入力、編集、表示が出来る。また、素材（アップロードしたファイル、URL）を入力したデータに関連付ける事が出来る。

SHARE : 共有

入力した情報から好きな組み合わせを選び出してプレゼンテーションを作成したり、作成したプレゼンテーションをプレビューして、他人からの見栄えを確認出来る。また、他人や外部の人へ自分のプレゼンテーションをアクセス可能にする。

VIEW : 閲覧

他人が共有しようとしている情報へのアクセスを円滑にし、アクセス許可されている追加材料へのコメントを許可する。

(エミットジャパン, 2010)

また、6 つの情報カテゴリーとは、e ポートフォリオで入力、共有、閲覧できるものであり、以下が挙げられる。

- ・ 個人情報
- ・ 教育
- ・ キャリア
- ・ スキル

- ・ 専門
- ・ 評価

(エミットジャパン, 2010)

なお、現実にはeポートフォリオというものの明確な定義がある訳ではなく、これらはいくつまでも一例であると考えらるべきである。

4. eポートフォリオのプラットフォーム

eポートフォリオを実現するシステムとしていくつかのオープンソースソフトウェアと有償プロダクトが存在する。その代表的なものは以下である。

(1) OSPI (図1)

1995年に Minnesota Duluth 大学で導入されたシステムが、オープンソースとして提供されていた。現在はオープンソース LMS である Sakai プロジェクト (<http://sakaiproject.org/>) の一部として取り込まれている。



図1 OSPI (出典 : <http://www.theospi.org/>)

(2) Mahara (図2)

Mahara は、2006 年にニュージーランドの New Zealand's Tertiary Education Commission's e-learning Collaborative Development Fund (eCDF) のベンチャー基金を受けスタートした。当初開発には、Massey University、Auckland University of Technology、The Open Polytechnic of New Zealand、Victoria University of Wellington の各大学が参加した。スタンドアロンシステムとして利用できる他、LMS として利用者の多い moodle との親和性も高いため、全世界で利用が拡大している。日本においても、日本語対応等のローカライズが進んでおり、インストールや操作に関する日本語マニュアルも充実している。(http://wiki.mahara.org/Mahara 日本語ドキュメント) また、オープンソースではあるが、サポートを有償で請け負うベンダーもあり、特に最近国内の大学でも利用しているところが増えている。



図2 Mahara (出典：http://mahara.org/)

(3) manaba folio (図3)

純国産のeポートフォリオシステムであり、ASAHI ネットからリリースされている。

同社の説明資料によると、以下が主な特長として挙げられている。

- ① 学生一人ひとりにポートフォリオスペースを提供。レポートや資料などを蓄積していくことができる。
- ② 一人ひとりのポートフォリオを、教員、学生本人、学生同士が確認し、評価していくことで、それまでの学習成果と次の目標が明確になる。
- ③ 授業やクラスで利用する「コース」、学生や教員が作成・参加できる「コミュニティ」など多彩な機能を活用できる。

(ASAHI ネット, 2010)



図3 manaba folio (出典: <http://manaba.jp/about-folio.html>)

ポートフォリオ評価を、学生が「ためる」(学習を進める過程で発生する成果物を蓄積)、「みる」(蓄積された情報を評価・再構成)、「ふり返る」(学習成果の確認や次の目標の協議)という3つのプロセスの繰り返しと捉え、システ

ムが構成されている。「コレクション」という単位でデータを蓄積する「ポートフォリオ」、学生や教員が自由に作成・参加できる SNS である「コミュニティ」、講義やクラスなど学習単位ごとのコミュニティである「コース」、教員だけが見ることができる「マネジメント」の4つの主要機能が提供される。学生から提出されたレポート等は、①全員が閲覧・コメント可 ②同じ課題の提出者と教員が閲覧・コメント可 ③提出者本人と教員のみが閲覧・コメント可というように公開範囲を設定することができる。

国内企業の開発した日本語システムであり、同社が全国各地で頻繁に導入セミナーや事例紹介等を開催していることもあり、導入する大学が急増している様である。特筆できるのは、パッケージ形式で学内サーバにインストールするという方法以外に、専用サーバによる ASP 形式のサービス提供が可能な点である。このため、全学的な導入に先立って、一教員や一授業等での小規模な試行導入を比較的安価に始められる。LMS をはじめとしたこの種の学習支援システムを学内サーバで稼働させるか、学外の ASP から提供を受けるか、いずれにもメリット・デメリットが存在するが、ASP の採用も今後の有効な選択肢の一つとはなり得ると考えられる。

Ⅳ 大学における e ポートフォリオ実践事例

昨今、全国の大学で「eポートフォリオ」の導入、活用が広がっているということはよく聞く。しかし、実際には学内で閉じたシステムであるため、現時点その活用状況等は教育関連学会等での発表を通じてしか知る機会はほとんどないのが実状である。ここでは、少数ではあるが、eポートフォリオの事例として取り上げられる大学についてまとめる。

1. 金沢工業大学

さまざまな先進的な教育への取組で有名な金沢工業大学であるが、eポートフォリオについても、早い段階から積極的に採用している。

同大学では、「修学」、「キャリアデザイン」、「自己評価レポート」、「工学設計」、「達成度評価」という5つのポートフォリオを組み合わせ、相互に関連して運用している。その中心となる修学ポートフォリオでは、全学生が毎日「1週間の行動履歴」(①出欠席遅刻 ②学習 ③課外活動 ④健康管理 ⑤1週間で満足できたこと、努力したこと、反省点、困ったこと、)を記録している。教員は、それぞれに詳細なコメントをつけて1週間以内に返却することになっている。さらに学生はそれに対してコメントを記入するという形で、双方向のコミュニケーションというプロセスを30週繰り返すことになる。これらを通じて、学生は生活上で何が重要か、優先順位は何かに自ら気づき、自己管理能力とタイムマネジメントが身につくという。それに加え、学期末に「各期の達成度自己評価」を作成し、各自の担当教員に提出することになっている。「達成度評価ポートフォリオ」では、他の4つのポートフォリオの成果を要約し、総合的に捉えることによって1年間の自分の学習を評価し、自己成長の軌跡と自覚・自信・反省などを確認し、次年度の目標を再設定する。

同大は、組織的にeポートフォリオを導入、運用しているまだ数少ない例だと思われるが、教員の負担は相当高く、それを克服するだけの意識の高さが学内に広く行き渡っているのだろう。

2. 慶應義塾大学

慶應義塾大学教職課程センターでは、eポートフォリオシステム「教職ログブック」を導入し、1,500名の学生と教員が利用している。学生が教員免許を取得するまでの成果をeポートフォリオに蓄積・評価できるシステムとして運用し、さらに学生同士の活発なコミュニケーションを促進するツールとして幅広く活用されている。

同大学には教育学部がなく、各学部学科に教職課程が設置され、専任教員が担当している。しかし、キャンパスが4カ所にまたがっており、教職課程を履修している学生も2～4年生と幅広いため、学生と教員、学生同士のつながりができにくかった。このため設立された教職課程センターでは、Webを活用し

たネットワーク型のポートフォリオの採用が最適と考え導入された。

学習の過程を評価しながら、他者との関わりの中で目標に向かうというアセスメントの機能として有効に活用されている。また、ネット上の学びの場で見知らぬ学生同士が活発に意見交換をおこなったり、授業中のディスカッションの続きを掲示板で深めたりとコミュニケーションの場としての意味も大きい。学生と教員、学生同士がつながり合い、響き合うという協調学習の考え方とそれを実現するプラットフォームとしてのeポートフォリオがうまく機能している例であると言える。

3. その他

前述したASAHI ネット manaba folio の販促用資料にいくつかの大学における導入事例が掲載されている。この中から主要なものを抜粋する。

(1) 国際基督教大学

学生が「何を学ぶのか」を自発的に決める「アカデミックプランニング」を実践している。学生は定期的に学修目標をエッセイにまとめ、教員や専門スタッフによるアドバイジングを受けたり、学習を重ねながら長期的な学修計画を立てる。学修目標がポートフォリオに記録され、記録を参照しながら的確な指導を行うことが可能となった。

(2) 東洋大学

文学部教育学科初等教育専攻では、学生が1年次から学校現場体験を積む「往環型教育実習」を実践している。往環型教育実習では、大学教員に加えて、小学校の実習指導教員や教育委員会など様々な関係者が学生の実習をサポートする。学生が教育実習の成果物を蓄め、それを様々な関係者が評価し、学生が振り替えるためのシステムとしてeポートフォリオが採用された。

(3) 和洋女子大学

学生の学びの成果物を蓄積するシステムとして採用した。eポートフォリオに学生一人ひとりが自らの学生生活の記録を残していくことで、自分自身の成長の過程を自覚し、就職活動をする際の自己アピール作成の参考にさせようと計画している。また、管理栄養士などの国家試験対策として、教材配布や掲示板を用いた質疑応答などきめ細やかな指導をeポートフォリオで行い、合格率向上につなげている。

その他、同資料には 津田塾大学、福岡女子短期大学、中京学院大学、白百合女子大学、国士舘大学、大阪商業大学等が導入実績として紹介されている。

(ASAHI ネット, 2010)

V キャリアデザイン講座 I における取り組み

1. 本学における eポートフォリオの取り組み

本学でのeポートフォリオの取り組みとしては、2007年度後半から試行運用を開始し、2008年度からは全学生にシステムを公開した。学生と担当教員（クラスアドバイザーやゼミ担当教員）との交換日記形式で、教員の指導により学生の成長を促すものとして企画された。在学中を通して、学生生活の記録を残し、卒業後の進路を考える時期に参考することを目的とする。

使用形態としては、「教員が設問形式で記入させるもの」と「学生が自身で記録するもの」の2通りで運用している。予め設定した設問方式で記入させる形態としては、例えば、学科やゼミ等で共通テーマの達成目標とその計画を学生に回答させ、これに教員がその目標の実現に向け学生の成長を支援するコメントを記入することにより教員と学生のコミュニケーションを図る。学生が自身で記録する形態は、日記のように自身の学習や生活について主体的に記録し、自身の意識と行動を確かめ省察する。教員はその記録に対して励まし等のコメントを付記することで成長を支援する。

eポートフォリオには自発的な書き込みを期待していたが、実際の書き込みは多くはなかった。2008年度はキャリアデザイン講座Ⅰでも、将来、卒業後の進路決定の参考となることを説明し、自分がうれしかった事・頑張った事など、自発的に記録するよう促してはいたが、1年生の時点では、直接的な必要性を実感できないためか自発的な記録は行えていない状況にあった。その為、課題などに指定し、ある程度強制的に記録する仕組みにする必要性を感じていた。しかし、eポートフォリオはシステム上、学生とクラスアドバイザーの情報共有に限定しており、クラスアドバイザーではない講義担当教員には閲覧できない仕組みとなっていた。このため、課題としてeポートフォリオを利用する場合は別途印刷物を提出させるなどのチェック方法を考える必要があった。

授業での情報共有としては、学生ポータルサイト（光華navi）のクラスプロフィール機能（図4）を活用することとなっていた。クラスプロフィールには、出欠管理のほか課題管理、小テスト機能といった講義に必要な機能は充実しているが、その目的から講義年度が替わるとクリアされる仕組みになっている。キャリアデザイン講座Ⅰにおける気づきは、記録したデータを卒業時まで保管することに意義があり、ここにもシステム上の問題があった。



図4 学生ポータルサイト（光華navi）のクラスプロフィール機能

2. キャリアデザイン講座 I の特徴

本学では、入学後大学生活をサポートする基礎教育として、1・2年生に各学科で「基礎ゼミ」またはこれに相当する科目を置くこととしている。基礎ゼミは、少人数制による個別対応教育を実施しており、その中心課題の一つとしてキャリア教育（就労意識の喚起）に取り組んでいる。少人数授業の利点を生かして、個別相談・指導など、個々の学生との十分なコミュニケーションを形成し、職業への意識を引き出すことに努めている。

キャリアデザイン講座 I は、1年次後期に全学部学科を対象とし、2クラス開講し、毎回違うメンバーでグループワークを行うことを特徴とする。初対面の人とコミュニケーションをとる力を身につけること、自分とは違う分野に興味を持つ学生ともグループワークを行い、情報共有・意見交換を行うことで視野を広げ、共感する事、社会には様々な考え方があり、その考えを理解する事が目的の一つであり、以下の3点を特徴としている。

- ① 学部・学科を超え、毎回違うメンバーでグループワークを行うことで、初対面の人とのコミュニケーションをとる力を身につける
- ② 全国で実施されている診断テストを参考にして、客観的に自分を分析し、自分について考える。
- ③ 実際に働く人（卒業生）の話を聞いて、社会を身近に感じる。

キャリアデザイン講座での「気づき」は、学生生活を通して日々の過ごし方を考える動機づけとなる。またその記録は、卒業後の進路を決定する際に、過去の経験で感じた事、考えたことからどう行動し、どのような結論につながったかの成長過程を参考にできる。その為、毎週講義座終了後に授業で学んだ事をレポートし、提出する事を課題としていた。

学生が得た「気づき」で特徴的なレポートについては、翌週の講義の冒頭で「気づき」の一例として発表し、講座フォローすると共に受講生に情報共有し、学生生活の動機付けを行うこととしていた。

3. 気づきの記録と授業アンケートの実施

(1) 用紙による記録と問題点

2007年度は、毎週講義終了前に一定時間を確保し、授業で学んだ事をレポートし提出する事を課題としていた。学生が得た気づきで特徴的なレポートは、翌週の講義の冒頭で気づきの一例として発表し、講義フォローと情報共有を行っていた。

この科目では、毎回違うメンバーでグループワークを行うことを特徴としているため、毎回の授業で座席順を変更している。その為、受講者数が多くなるとレポート返却が困難である。また、用紙でのレポートでは、卒業後の進路を考える3年生までの保管には向かないと思われた。

(2) 課題管理システムを利用したレポート提出と問題点

用紙での保管は「気づき」内容の分類や情報活用にも手間がかかる。また、学部・学科を超え毎回違うメンバーでグループワークを行う講義は希少であるため、授業時間内は講師が伝えたい事やグループワークに十分に時間を充てることとし、2008年度は、講義時間内にはその日の気づきをメモする程度にとどめ、自分の考えを振り返りレポートにまとめることは、次回講義までの課題とした。毎週のレポートはクラスプロファイル機能の課題管理に投稿する事で、提出・回収時間を削減することにした。

クラスプロファイル機能は、Webシステムで構築されており、課題管理は直接コメントを投稿する方法と、あらかじめワープロなどで作成した文書を添付ファイルとしてアップロードする方法が準備されている。クラスプロファイル機能を活用することで、担当教員から学生へコメントする事も容易となった。ただし、クラスプロファイル機能は、その目的から保管が授業年度に限定されるため、授業期間中は見返すことができるが、進級の時点でクリアされる仕組みとなっていた。その為、卒業後の進路を考える時期までレポートを各自で保管する為に、また、そのレポートの二次利用を考えて、「気づき」はワープロで作成し添付ファイル形式で投稿する方法を採用することとした。

クラスプロフィール機能を活用することで、課題の提示と回収・返却が効率的に行えるようになった。しかし、ファイルを添付する形式のレポートでは、個々の記録内容を一覧形式で振り返ることはできない。また、クラスプロフィール機能は、講義期間中のみ活用するシステムである為、卒業までレポートを保管する為には、学生が自主的に管理する必要があった。中には、コンピュータに不慣れである為にファイルの運用管理になれず、ファイルを紛失する学生も存在した。投稿することで自然に「気づき」が蓄積され、卒業後の進路を考える時期に保管された情報を利用できる仕組みを活用できることが望まれた。

(3) 授業アンケートの実施

キャリアデザイン講座Ⅰは、1年次後期に全学部を対象とし、2クラス（Ⅰa、Ⅰb）開講している。2008年度は時間割配当の関係上、2クラスの履修人数にばらつきが生じた（表1）。授業回数を重ねる中で履修人数により授業への取組態度・授業目的の理解度に格差が生じているような印象を受け、30名程度のクラスに比べ80名クラスでは、後部座席の学生の私語や授業に対する無気力感が目立った。履修人数によって授業への理解度に影響はでないか気になり、授業の中間時点で授業アンケート（図6）を実施することにした。アンケート項目は、日頃、学生との会話の中で気になっていたこと、テキストで取り扱っている内容から抜粋して17項目とした。キャリアデザイン講座Ⅰとしては、就労意識の喚起を主要目的としていることから、アンケート項目は、働くことをイメージできているか、また働き続ける意欲や生きがいを得られたかどうかを中心に設問を設定した。その他、日々の学生生活を有意義に過ごすために、目標を持つ大切さやキャリアデザインの目的が理解できているかを設問に加えた。講義で常に問いかけている内容であることから、授業の理解度を確認できると考えた。

キャリアデザイン講座Ⅰ（意識調査）

回答日： 年 月 日

（出席チェック用） 学生番号： _____

このアンケートは成績には影響ありません。皆さんの意識傾向調査ですので素直な気持ちで回答してください。

No.	項目	記入欄(ひとつに○で囲んでください)
1	いつまでも学生でいたいと思う	はい どちらとも 書えない いいえ
2	職業に就きたいという気持ちがある	はい どちらとも 書えない いいえ
3	どんな職業に就きたいか具体的なイメージがある	はい どちらとも 書えない いいえ
4	自分の自慢できるところがある	はい どちらとも 書えない いいえ
5	自分の弱点はわかっているつもりである	はい どちらとも 書えない いいえ
6	自分にはどんな職業が向いているかわからない	はい どちらとも 書えない いいえ
7	就職して向いていないと感じたらすぐに転職する	はい どちらとも 書えない いいえ
8	就職したら少なくとも3年間は続けたいと思う	はい どちらとも 書えない いいえ
9	新聞やテレビのニュースを見ることが面白い	はい どちらとも 書えない いいえ
10	人には言えない失敗がある	はい どちらとも 書えない いいえ
11	どんな職業が自分に向いているか考えることがある	はい どちらとも 書えない いいえ
12	一年以内に達成したい目標がひとつはある	はい どちらとも 書えない いいえ
13	卒業までに取得したい資格がある	はい どちらとも 書えない いいえ
14	結婚したら仕事はやめて家事に専念したい	はい どちらとも 書えない いいえ
15	趣味として1年以上続いているものがある	はい どちらとも 書えない いいえ
16	就職については、まだ考えられない	はい どちらとも 書えない いいえ
17	キャリアデザインを学ぶことは就職以外にも役に立つと思う	はい どちらとも 書えない いいえ

この授業で、期待していることがあったら記入してください。

図6 授業アンケート

表 1 は、2008 年度の授業中間時点と最終回で採取したアンケート結果である。出席人数が 30 名以下の I a クラスと 80 名前後の I b クラスの授業 7 回目（中間時点）でのアンケートでは、目標設定力・授業目的の理解度は、ほぼ同じ結果であった。この結果からは、受講人数により授業理解度に差は見られないと見えた。確認のため、最終回で同内容のアンケートを実施したところ、理解度の向上に大きな差が出ていることが分かった。この結果から、30 名以下のクラスでは、授業後半で理解度がより向上していくことが読み取れる。授業前半で感じた「授業への取組態度」の違いが、理解度に表れた結果と考えられ、多人数講義での「学習意欲の継続・向上」について対策が必要と考えられた。

キャリアデザイン講座では、授業での気づきを積み重ね、振り返ることで、将来に向けた目標や意欲を高め、学生の成長を支援する。その為、積み重ねが増える後半部分で大きな成長につながると考えられる。少人数講義では、教員と学生の接触が比較的取りやすく気づきに対してフォローしやすいが、多人数になると、どうしても教員・学生間の距離感は広がってしまう。その距離感を埋めるために、学生ひとり一人と時間的・空間的にコミュニケーション形成の場を構築することが重要であると考えた。講義担当教員とのコミュニケーションに加え、e ポートフォリオへの気づきの投稿は、より身近なクラスアドバイザーからのコメントの機会を増やすことにつながり、複数の教員とのコミュニケーション形成で、この距離感を埋める効果があるのではないかと期待された。

表 1 2008 年度授業アンケート結果

クラス	履修登録	7 回目アンケート			最終回アンケート			単位取得
		人数	目標設定	授業目的理解	人数	目標設定	授業目的理解	
I a	39 人	26 人 (67%)	77%	73%	25 人 (64%)	92%	84%	25 人 (65%)
I b	138 人	80 人 (60%)	78%	75%	84 人 (61%)	80%	76%	81 人 (59%)

(4) 気づきの記録としてのeポートフォリオ活用

上記問題点を解決するため2009年度の講座では、各学科のクラスアドバイザーに協力を求め、講義で得られた「気づき」はeポートフォリオに投稿することとした。eポートフォリオに投稿された記事は、卒業まで保管される。提出の手順はクラスプロファイル機能と同様であるが、レポートは添付ファイル形式ではなく、直接Webシステムにタイトルと詳細内容を投稿する。投稿日順やタイトル順に並び替えて一覧表示でき、投稿する度にこれまでの気づきを容易に振り返ることができる。タイトルで並び替えることが可能であることから、タイトルを自分なりに工夫することで気づきを分類別に容易に振り返ることも行える。

さらに、前述のとおりeポートフォリオはクラスアドバイザーとの情報交換の場であることから、学生は講義担当者ではない第三者に報告する形式で「気づき」をまとめる必要がある。その為、文章を再考し簡潔に記述することが求められた。その結果、講義での気づきはさらに整理され、記憶に残るものとなると考えられた。そして「気づき」の報告に対してクラスアドバイザーから学生の成長を励ますコメントの機会が増える環境となる。気づきの記録にeポートフォリオを活用することで、学生が自らの気づきを容易に振り返る機会を増やし、講義担当者とクラスアドバイザーが協力して、学習意欲の向上を図る教育環境の改善につながった。

(5) eポートフォリオ投稿実績と授業アンケート結果

2009年度キャリアデザイン講座Iの気づきとしてeポートフォリオへの投稿数は、229名のべ2,065件であった。

2009年度は初回と最終の授業で、授業アンケートを実施した。その結果を表2に示す。授業目的の理解度を比較すると、2008年度(eポートフォリオ導入前)には、25名クラスでは11ポイント向上に対して、80名クラスでは1ポイントの向上であった。eポートフォリオを導入した2009年度では、90名を超える2クラス共に、11ポイント、13ポイントの向上が見られた。この結果は、30名

以下のクラスでの理解度を上回り、最終的にアンケート回答者の 86% 以上の学生から期待する回答を得られる結果となった。(表 2)

また、単位取得率も 2008 年度は、履修登録数 39 名のクラスでは 25 名 (履修登録者の 65%)、履修登録数 138 名のクラスでは 81 名 (同、59%) が単位取得したが、2009 年度は、履修登録数 137 名、126 名両方のクラスで、履修登録数の 65% 以上が単位取得につながっている。このことは、多人数クラスでも学習意欲の継続・向上が図られた結果と考えられる。

入学年度による学生の特質やその他の要因が影響したことも考えられるため、この結果をもって、日々の気づきを e ポートフォリオに記録することで、「気づきの定着」ができ「学習意欲の継続・向上」につながったと断言する事は出来ないが、アンケート結果など総合的に判断して、少なくとも e ポートフォリオによる日々の気づきの記録は、学習意欲の向上につながると評価している。

表 2 2009 年度授業アンケート結果

クラス	履修登録	初回アンケート			最終回アンケート			単位取得
		人数	目標設定	授業目的理解	人数	目標設定	授業目的理解	
Ia	137 人	134 人 (98%)	46%	75%	99 人 (72%)	76%	86%	89 人 (65%)
Ib	126 人	123 人 (98%)	51%	75%	94 人 (75%)	79%	88%	83 人 (66%)

VI まとめ

e ポートフォリオへの投稿内容を活用する目的は、自分の考えや行動を振り返る事で日々の過ごし方を充実させる、そして、卒業後の進路を考えるとときに、これまでの経緯を振り返ることで自分に最適な進路を選択する参考とすることである。講義期間中にすぐに効果が表れるものではない。今回の試みで、通常講義で活用するクラスプロフィール機能の課題管理と比較して、講義に対する

興味や理解度が落ちる事はなかった。この結果から、将来にむけた学生の成長につながると考えられる e ポートフォリオをキャリアデザイン講座 I で継続する意義はあると考えられる。

e ポートフォリオへの投稿を実践して、まだ1年である。上記成果が一過性のものであるかどうかは、さらに活用を継続し効果を測定する必要がある。また、今回は課題として学生に投稿を義務付けたが、本来、キャリアデザイン講座での気づきは、自らの為に主体的に記録する必要がある。強制されるのではなく、自ら将来の為に「気づき」を自発的に記録することを習慣化する必要がある、この為の仕組み作りも今後の課題である。

最後に、e ポートフォリオを授業で利用することにご協力いただいたクラスアドバイザーの皆様、投稿記事の抽出に協力いただいた学園 IT 推進部、その他関係者の皆様に感謝いたします。

参考文献 等

- 土持ゲーリー法一. (2009). ラーニング・ポートフォリオ. 東信堂.
- 土持ゲーリー法一. (2007). ティーチング・ポートフォリオ. 東信堂
- 週刊エコノミスト編集部. (2010). 娘, 息子を通わせたい大学.
- 週刊エコノミスト 2010 年 8 月 31 日号 pp.20-41. 毎日新聞社.
- 経済産業省情報処理振興課編. (2008). e ラーニング白書 2008/2009 年版. 東京電機大学出版局.
- CIEC 編. (2008). 学びとコンピュータハンドブック. 東京電機大学出版局.
- ASAHI ネット. (2010). 教育機関向けポートフォリオ manaba folio リーフレット. ASahi ネット.
- ASAHI ネット. (2010). 教育機関向け教育支援システム manaba 活用ブック. ASahi ネット.
- エミットジャパンホームページ. (2010). 株式会社エミットジャパン
<http://www.emit-japan.com/>

OSPI ホームページ. (2010). OSPI

<http://www.theospi.org/>

Mahara プロジェクト. (2010). Mahara <http://mahara.org/>

Manaba folio. (2010). ASAHI ネット <http://manaba.jp/about-folio.html>

山本 嘉一郎・阿部 一晴・吉田 咲子.(2009). 京都光華女子大学におけるキャリア教育の取組－現代 GP「学生個人を大切にしたキャリア教育の推進」－. 京都光華女子大学研究紀要 第 47 号 pp.121-159. 京都光華女子大学.
教育基本法（平成 18 年法律第 120 号）について.

http://www.mext.go.jp/b_menu/kihon/about/06121913/001.pdf

法政大学 キャリアデザイン学部.

<http://www.hosei.ac.jp/careerdesign/shokai/index.html>

改正後の教育基本法 (平成 18 年法律第 120 号)	改正前の教育基本法 (昭和 22 年法律第 25 号)
<p>(教育の目標)</p> <p>第二条教育は、その目的を実現するため、学問の自由を尊重しつつ、次に掲げる目標を達成するよう行われるものとする。</p> <p>一 <u>幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな身体を養うこと。</u></p> <p>二 <u>個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養うとともに、職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養うこと。</u></p> <p>三 <u>正義と責任、男女の平等、自他の敬愛と協力を重んずるとともに、公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと。</u></p> <p>四 <u>生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養うこと。</u></p> <p>五 <u>伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。</u></p>	<p>第二条（教育の方針）教育の目的は、あらゆる機会に、あらゆる場所において実現されなければならない。この目的を達成するためには、学問の自由を尊重し、実際生活に即し、自発的精神を養い、自他の敬愛と協力によつて、文化の創造と発展に貢献するように努めなければならない。</p>

資料 1 改正前後の教育基本法の比較

(出典：文部科学省 http://www.mext.go.jp/b_menu/kihon/about/06121913/002.pdf)

科目名：キャリアデザイン講座Ⅰ

授業テーマ：自分の将来と大学生活の過ごし方

授業概要：

大学での学びは、高等学校までの「与えられる授業（授業を受ける）」から、「自己責任のもと自ら目標を持って計画的に学ぶ」と変わります。

ただ授業を受けるのではなく、1年生から「自分の将来を考え」、「計画的に能力開発、キャリアの創造を目指した学び」、そして学生生活で学んだ事を、「自分の言葉で語る力」が就職活動をはじめ、社会では重要な武器になります。

「キャリアデザイン講座Ⅰa」では、

- 1) 自分の将来を考える
- 2) 目標をつくる大切さを考える
- 3) 社会に必要な能力を考える
- 4) 社会で働くということを考える
- 5) なりたい自分の実現に向けて大学生活の過ごし方を考える

について、「自分から“目標を定め実行する・考え討議する・発表する”力」をつけることを目指して、演習を交え、理論的に、体系的に学びます。

授業計画：

- 第1回 学園生活で何を学ぶ～オリエンテーション～
- 第2回 答えはいっぱいある / 目標の力 / 自己紹介
- 第3回 協力と共有
- 第4回 自分を伝える難しさ
- 第5回 コミュニケーションの意味
- 第6回 社会の中の私（卒業生からの応援メッセージ）
- 第7回 ディスカッションの構造と心構え
- 第8回 世の中のことを考えよう
- 第9回 自己概念とキャリアマインド
- 第10回 大学生活と自己責任
- 第11回 目標実現までのプロセス
- 第12回 自分に見えない自分の姿
- 第13回 私を支えてくれた人
- 第14回 私のキャリアデザイン
- 第15回 まとめ

科目名：キャリアデザイン講座Ⅱ

授業テーマ：職業と私の進路

授業概要：

キャリアデザイン講座では、なりたい自分を描き、そうなるための行動計画を立てる。そのために自分の歴史を振り返り、自分の適性を考える。そして、世の中にどのような職種・職業があるのか調べ、職業と働くこと、社会が求める人材や本学における就職活動の概要、自分の進路に関わることをより具体的に学ぶ。

本講座では、グループワークを交えて、卒業後の進路選択に備えて「働くとは」、「学生と社会人との違い」、「働くいきがい」、「学生時代の過ごし方」などを考え、働くことの魅力を学ぶ。また、世の中の職種や資格について理解を深め、自分の進路を具体的にイメージする。身近な先輩の活動を参考にして、目標に向かってチャレンジする方法を考えること、社会人として必要なコミュニケーション力を身に付けることを目指す。

授業計画：

1. キャリアデザインの基本
2. ライフサイクルと職業
3. 生涯収支と職業
4. 職業と将来設計
5. 働く意味と自分の職業感
6. 学生生活で得るキャリア意識の明確化
7. 環境に応じた働き方の理解
8. インターンシップと就職活動（後輩へのメッセージ）
9. 求められる基礎能力
10. 世の中の職種・資格
11. 自分の目指す職種と適正
12. 事例で考える将来設計
13. さまざまなキャリア形成のあり方
14. キャリアデザインの方向性をつかむ
15. キャリアデザイン全体の振り返り

資料3 キャリアデザイン講座Ⅱシラバス（出典：京都光華女子大学）

科目名：キャリアデザイン講座Ⅲ

授業テーマ：就職活動のための知識習得と体験

授業概要：

大学生活から社会に出るためには、進路を自分で選択し、就職活動をしなければならない。本講座では、進路選択する時に役に立つ知識や就職活動の進め方を学び、実際に、インターンシップに参加することで就職活動から就労までを模擬体験する。

インターンシップ先は、将来自分が活躍したい業界や職種をイメージし、主体的に探す必要がある。通える環境を考えて企業や団体を自分で選択しエントリーを行う。エントリー後は、他大学の学生と競い合って面接試験を突破することでインターンシップに参加することができる。この体験は、就職活動そのものである。インターンシップに参加した経験は、自分の強みとなり、実際の就職活動に大いに役立つ。インターンシップ体験は、就職活動において実績として評価される。

授業計画：

1. インターンシップと就職活動の進め方
2. 職種・業界研究
3. 一般的なエントリーシート作成練習
4. エントリーシートの添削
5. インターンシップ目的の明確化
6. インターンシップの探し方
7. ビジネスマナーの基本知識
8. ビジネスマナーの実践
9. コミュニケーショントレーニング
10. インターンシップ先を中心とした業界研究
11. インターンシップの目標設定
12. グループディスカッション
13. インターンシップ体験（実施時期・期間はインターンシップ先による）
14. インターンシップ成果発表
15. 事後報告書の作成と提出

資料4 キャリアデザイン講座Ⅲシラバス（出典：京都光華女子大学）

